

加藤哲実先生のこと

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学法律研究所 公開日: 2023-01-31 キーワード: 作成者: 小林, 史明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/00022758

加藤哲実先生のこと

小林 史 明

イングランド東部、ちょうどロンドンから北に100キロほどの場所にセント・アイヴズ (St Ives) という小さな街がある。昨夏、ケンブリッジからイーリーを経由してこの街に向かっていた。運転するのは快く同道してくれた同僚の James Sharp 先生である。私は車中、そのひと月ほどまえに、神保町の「新世界菜館」で加藤先生にうかがった話を書き留めたメモに目を落としながら、窓の外に広がる沼沢地 (fens) の風景を眺めていた。

加藤先生は、私が夏季休暇を利用してケンブリッジを訪ねるのを知って、ぜひとも少し遠出して、イーリーで鮮麗なステンドグラスのある大聖堂、ピーターバラでイングランド・ゴシックの壮麗な大聖堂を観てほしいとおっしゃった。そして最後に、セント・アイヴズには大聖堂とはまったく趣の異なる小さな教会があり、そこもまた素晴らしいと勧めてくださった。先生は、「時間があれば」とか「できたら」という言葉をお忘れにならず、いつも押し付けがましいところがまるでない。それでいて、先生に言われるとそのように行動してしまうのだから、親象が子象のおしりを鼻でやさしくコツク様子に似ている。

セント・アイヴズは加藤先生について何かを申し上げようとすれば避けることができない街の名である。街の入口に到着すると、看板に「Ancient Market Town へようこそ」とある。中世からの一大交易地であり、そこで行われる歳市を含む定期市に関する法、慣習、宗教の相互生成の仕組みは加藤先生の丹念な史料研究によってわたしたちの知るところとなった。街を象徴するモニュメントは15世紀に架けられた石造りの橋である。橋のなかに教会を備えた、世にも珍しいそして美しい橋である。ちょうど橋のたもとにたどり着くと、この小さな石橋を車で渡ろうとする女性と重量オーバーを理由にそれを阻止しようとする男性の諍いがはじまった。この諍いの目撃者となった私は、ちょうどここが当時から定期市の会場であり、ここでの紛争の管轄が、国王の勅許状を背景にした歳市裁判所 (court of fair) にあったという先生の説明を想いだした。当時の証明方法は陪審か雪冤宣誓

であり、どちらも被告人をよく知る人物だけが選ばれていたから、この揉め事での過客にすぎない私が喚ばれる可能性はない。またこれは先生の中心的な御所論と私が考えるものだが、「宣誓証言」に重きを置くこれらの手続きは、キリスト教信仰という宗教的心性の共有があってこそ成り立っていたという説からすれば、やはり私が喚ばれるはずもない。なにより今は中世ではない。先生のご研究の基底にあるのは、「法も経済もそれ自体として分析出来るようなものではなく、それらは社会の中に埋め込まれていたが故に、我々は社会の底流にある心性を問題としてきた」(『法の社会史』三嶺書房、1991年)という問題関心であろう。

先生は、これを明らかにされるため、在外研究を含めこの街に幾度も滞在され、史料研究や実見による調査を重ねてこられた。そこで得られた成果は先生のご著書でふんだんに披露されている。本当であればそれをお伝えすべきところであるが、残念ながら紙幅は限られているし、たとい紙幅に余裕があったとしても不勉強な私にはそれを簡要をもって伝える能力が欠けているので、そのほんの一部を私の旅の続きとともに綴っておきたい。

橋から少し北に向かうと、しずかだが満々と湛えるウーズ川 (River Ouse) のほとりに、落ち着いたたたずまいを見せるノリス・ミュージアム (Norris Museum and Library) がある。水鳥が遊び自然保護区にも指定されている中洲を正面に抱えるこぢんまりとしたこの博物館も、先生に勧められた場所である。

先生が2013年に上梓された『宗教的心性と法——イングランド中世の農村と歳市』(国際書院)の裏表紙にはこのミュージアムの写真が使われている。また背表紙にはセント・アイヴズ議会の使用許可を得て街の紋章が配されている。セント・アイヴズの議会日より *The Bridge* 紙によればこのライブラリーには加藤先生のご著書が所蔵されている。同紙では、セント・アイヴズの議員が、先生のご論攷 “‘God’s Penny’ as Earnest Money’ (in *Meiji Law Journal*, vol. 21) を紹介している。なおこの論攷も同所に所蔵されている。この「神の1ペニー」は手付の一種で、将来の給付を目的とする契約の拘束力を、神に誓うことで鞏固にするために交付されるが、元々はキリスト教的呪術性観念にその力の源があった。時代を経るにつれ、外国商人との取引に用いられたり、国家法によって実定化されたりしていくが、その背景には商人の宗教的心性の変容があったことが描き出されていく。「神の1ペニー」という法現象から、アングロ・サクソン慣習法、キリスト教的心性、

国家法を総合していく筆致はスリリングでさえある。紹介した議員も本論攷を「読み通さずにはいられない引き込まれる研究」と評している。

とまれこの街は実にのどかである。釣り人を横目にさらに北上すると鋭い尖塔を擁する小さな教会が構えている。おそらくここが1ペニーの聖別や宣誓を取り仕切った司祭のいたところなのだろう。先生のセント・アイヴズにまつわる著作を読んでいることもあり、教会に入ると当時の光景が目浮かぶようであった。一心に祈りを捧げる住民を見て、はしなくもその感を強くしたのかもしれない。教会をあとにして、かつてこの地で牧場を営んだクロムウエルの銅像の横を通り過ぎ帰路についた。ケンブリッジへと戻る車中で、セント・アイヴズという街と先生がじつにじっくりするような気がしてきた。どことなく穏やかで、それでいて心性として情熱的なものを持ち合わせ、それらが伝統に裏打ちされて泰然としている様子である。

顧みれば、私は先生の授業を学部・大学院を通じて履修することがついに無かった。私の専攻する法哲学と法社会学は一般的には隣接分野だと思われるし、法哲学専攻には実定法を避ける者が少なくないのだから履修していないほうが不思議である。ところが私は基礎法学科目を履修したことがほとんどない。史料を丹念に読み込んで、そこから歴史の意味を形成していく先生の研究手法は、確乎とした忍耐力とある種の律儀さが必要であるがそのどちらも私には欠けていた。つまり、怖かったのである。

私は2016年まで大学院生であったので、「同僚」が書くとされる本稿の、それも加藤先生への言葉を執筆することに今でもおののいているのであるが、長い院生生活においても先生は私にとっては一種特別の存在でいらっしやう。私が好き放題に研究もどきをしていると、ふと先生のご論攷が目に入る。先生はご自分でも書かれているように「問題関心が長期間に亘って変わらずに持続して」いらっしやう。そんな先生を遠くから拝見していると、いかに自分がちょこまかと覚束ないかが自覚されるのである。

明治大学大学院生が執筆する論文は、指導教員が務める主査以外に匿名の副査2人による査読がある。研究者としてのキャリアに関わる論文公刊の成否を決める査読は、大学院生にとっても気がかりなものである。結果もさることながら3名の審査員から返却される原稿が、私自身とても気になっていた。というのも、返却される原稿に、いつも一つだけマークや書き込みがあったからだ。匿名査読制度

であるから訊ねたことはないが、きっとこれは先生であつたに違いないと私は確信している。このように確信できてしまうのが律儀な研究に向いていない証左ではあるが、先生に読まれているというこの緊張感によって拙劣ながらも最低限のものを書かねばならぬと思えたのである。拙稿に残されたわずかな点や書き込みを見返しつつ今私はそう感じている。「1 ペニー」は大した額ではない。核心はそこに畏れを感じる心性の方にある。このような「神秘化」をきっと先生は嫌がられるであらうが。

私の指導教授はよく動く人であつた。一方、先生は動かない人である。私にとって、指導教授は昼夜や寒暖（ときに酷寒酷暑）をひっきりなしに生み出し続ける太陽のようであり、先生は北極星のような存在であつた。落ち着きのない私が、かろうじて一所を目指してこられた参照点であつた。顧みれば顧みるほど、先生のお蔭で研究を続けて来られたように思えてならない。

最後に、セント・アイヴズの議員の先生に対する賛辞を紹介したい。

「(セント・アイヴズの) わたしたちは、加藤教授を東京にいるわたしたちの教授だと自信をもって言うことができる」

研究を通じて当地の人々にここまで愛される加藤先生にご指導いただいたことは、私にとり、そして多くの学生・院生・同僚にとって忘れ得ぬ経験となつたはずである。

「先生はなによりもわたしたち明治大学法学部の教授である」とセント・アイヴズの人々に張り合つて、筆を擱きたい。先生には引き続きご研究を続けてわたしたちを鼓舞していただければ幸いである。長年にわたりありがとうございます。

了